

道具が発生した当初、ターゲットは人間ではありませんでした。むしろ人間がターゲットであることは、「ものの序で」といえましょう。生きてゆくための狩猟をもっと効果的に行うための発展でした。生活環境を改善するための道具であったのです。「序（つい）でに」というと語弊がありますが、それらの道具の殺傷能力が、序でに「戦いで人も殺すことにも十分な道具」だったのです。

歴史のずっと後のことではありますが、百姓一揆をイメージしてみましょう。帯刀はおろか、武器全般を持つことさえ許されていなかった農民は、普段農耕に使った鍬や鋤を手に手にもって襲いかかりました。薪を割る鉈は、相手の頭部を割ることも可能でした。草を刈る鎌は、人の喉元を掻き切ることができました。生活の道具が武器になったのです。それと同様です。しかし人を殺すことが目的の道具としては、効率面で不完全でした。

「戦争」や「紛争」で武器が使われるようになり、人を殺すことが目的の道具が生まれます。「序でに」が「主目的」である道具です。人間を豊かにするための発見は、同時に「戦局を有利に運ぶ道具」に応用でき、更には「戦局を有利に運ぶ道具」の発展が、戦後の生活を豊かにするに道具に応用される流れも現れました。

道具やそれを支える各種の科学は、そのものが善でも悪でもありません。どのように利用するかは、ひとえに人間にゆだねられます。「序でに」が「主目的」となる。これが顕著になっていったのは、初めて世界を巻き込む戦争となった第一次大戦への流れと現代にいたるまでと、私たちは位置づけました。

まずは棍棒から、様々出来事の転機となった第一次大戦双六を、スタートすることにしましょう。

おすすめ書籍 戦争の考古学 佐原真【著】、金関恕【編集】、春成秀爾【編集】

No.1  
No.2

## Loss of chivalry American Civil War 1861-1865

騎士道の喪失 南北戦争 1861-1865

## Ethnic Cleansing Variola virus 1763/Jun

民族浄化 天然痘ウイルス 1768年6月

イギリス軍の将軍ジェフリー・アマーストは、1754年から1763年にかけて起こったフレンチ・インディアン戦争・七年戦争を勝利に導いたことで英雄とされた人物です。その後、北アメリカの植民地を統括する総督となりました。アメリカ州の先住民に理解を示さず、排他之道を選択します。これが民族浄化政策です。この政策はインディアンの強い反発を受けました。ジェフリー・アマーストは、天然痘菌の付いた毛布や敷物などをインディアンに贈り、人種の根絶を試みます。大量殺戮の発想です。白人社会の他人種に対する非情さは、歴史の中で時折このような形で露見します。原爆を、果たして同種民族の住む国に投下できたであろうか…ということが囁かれることもありますが、こういった歴史上の背景から、そういった考えが芽生えても、さほど違和感はありません。違うと信じたいところではあります。